

<互いの必要>

どんなに腕の良い、お医者さんであったとしても患者さんがあって初めて仕事が成り立ちます。どんなに敏腕やり手の弁護士でもクライアントがあって初めて力を発揮することが出来ます。学校の先生は生徒がいて教えることが出来るわけですし、どんな優れた製品を出しても買ってくれる顧客がいるからこそ企業は成り立つわけです。社会は互いを必要としています。互いによって成り立っています。教会ももちろんそうです。いや、教会こそ互いを必要としています。今日の聖書のことばは別の聖書の訳では「私たちはキリストにあって一つのからだを構成しています。ですから、私たちはみな互いに属しているのであり、一人ひとりが互いを必要としているのです。」とあります。

私たちは互いを必要としているのです。しかし、現実の中で互いを必要としていることを認めにくくさせている要素があります。

<必要を認めにくくさせているもの>

その代表的なものは第一に個人主義です。現代の世の中は個人主義を称賛しています。私の人生は私のものである。どうしようと、どう生きようと私の自由だ。そして自立している人というのは、自分ひとりでうまくやっていける人のことであると思っています。しかし、多くの人は、そのような自信に満ちた外見の裏側に、多くの心の傷を抱え、寂しがりで、不安に満ちた自分を隠しています。つまり孤独です。いつも関心があるのは自分自身、自分の人生のことばかりです。人とつながるどころか、人と同じようにされるのが嫌いですから人との間、つまり人間関係において常に壁を作り続けます。

第二にプライドです。多くの、特に男性は助けを求めたり、自分の必要を言ったりすることは、自分の弱さを認めることであると感じています。人によってはそれは恥ずかしいことであるさえ思っています。しかしそれは神の願っておられることと全く違うことです。自分は人を助ける者であり、助けられるような者ではないと思っています。しかし、本当は人に自分の弱さを見せ、助けて下さいと言っても何も恥ずかしいことはなく、むしろそういう時にこそ、親しい友が生まれることが多いのです。

<関係の中に生きる私たち>

神様は私達人間を、関係の中に生きる存在として最初から造られました。人間が罪を犯す前、つまり罪の無い完全な世界（エデンの園）にいる時に神は「人が一人であるのは良くない」創世記 2:18 と言われたのです。この箇所は「人が一人であるのは良くない。わたしは、彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」とあるように、女が造られる箇所であり、結婚式の時によく引用されることから結婚が勧められていると受け止められがちですがそうではありません。「人がひとりであるのは良くない」ということが大切です。神様は人が孤独であることを嫌われます。神様は人が神の家族の交わりに加えられ、神の家族の一員として生きるように造られたのです。私たちは「人が一人であるのは良くない」ということばを人間が罪を犯してからのことばとして考える傾向があります。つまり、本当は一人でスマートにやり遂げたいものが情けないことに人に助けてもらわなければならない。「助けてください」などと本当は言いたくない。

そうではないのです。「人が一人であるのは良くない」というのは「人が独りぼっちで生きようとするのは神のみこころではない」という意味なのです。あなたが救われ、神の家族の一員とされた時に、神様

はあなたの人生という糸を他の兄弟姉妹の人生の糸に織り込まれたのです。

<一つのからだが築かれていく >

私たちは救われた時にキリストの福音という新しい量りによって自分を見つめ、評価するようになります。そうすると私たちの、他の人を見つめる目、特に教会における信仰の仲間たちを見つめ、評価する目もまた新しくなり、変えられていきます。そして信仰の仲間との間に新しい交わりが築かれていく、それがキリスト信者に与えられる新しい生活です。信仰の仲間たちとの間にどのような新しい交わりが築かれていくのでしょうか。そのことが4、5節に語られています。「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」。他の人たちと共に「一つのからだ」を形づくっていく、そしてお互いがその一つのからだの部分となって共に生きていく、それが、キリストの福音という新しい量りによって自分と他の人とを評価するところに与えられていく新しい交わりです。

他の人と自分とを比較しながら生きているところには、このような「一つのからだ」としての交わりは生まれません。人と比較して生きることは、どちらが上か下か、どちらがより優れているか劣っているか、ということが常に問題になります。そして自分の方が上だ、優れていると思うと、相手を見下す高ぶりが生じます。そこには「一つのからだ」としての交わりが生まれるはずはありません。また逆に自分の方が下だ、劣れていると思う所には妬みやひがみの思いが生じます。そこには、人の優れた点にケチをつけようとし、何かとアラ探しをするようなことが生じます。それもまた「一つのからだ」としての交わりを破壊するものです。つまりお互いどうしで比較し合っている所には、「一つのからだ」は築かれていかないのです。しかし私たちの自分を見つめる目が変わっていくならば、つまり自分が持っているものや能力を他の人との比較において確かめようとするをやめて、罪深く弱い者である私たちのために主イエス・キリストが十字架にかかって死んで下さったことを見つめるようになるならば、私たちはもう人と自分を比べる必要はなくなるのです。どちらがより優れているかを気にする必要はなくなるのです。主イエス・キリストにおける神の愛が自分に注がれており、それによって支えられ、生かされていることを知るなら、自分は人より上だとか、少なくとも人並みだと思うことによって自分を支えようとしなくてもよくなるのです。そしてその時私たちは、他の人を受け入れ、共に歩み、一つのからだを築いていくことができるようになるのです。

<からだから離れて生きないように>

教会はキリストのからだです。そして神様が私たちをそれぞれからだの各器官と言われた時に、どんな器官であろうと、本体から切り離して存在することは出来ません。キリストのからだを構成している他のクリスチャンから離れては生きてゆくことができないのです。一人一人のクリスチャンは奉仕をささげ、教会に貢献しています。しかし、同時にあなたを活かすために他のクリスチャンがあなたに貢献していることを忘れないようにしたいものです。ですから私たちが靈的に成長し、教会を建て上げる者の一人として歩むためには教会の仲間の人たちとつながっている必要があります。それもより強いつながりを築くには比較的小さなグループに加わる必要があります。その人間関係の中で互いに仕え合うこと、赦し合うこと、学びあうこと、互いに愛し合うことを体験してゆくのです。

神様が私たちを召され、救われたのは共に交わりを持つためです。クリスチャンの靈的な生活は互い

に交わり、支え合うことにかかっています。そしてキリストのからだなる教会において共に生きるためには、キリストにあって互いにつながり、互いに必要としていることをいつも心に留めておく必要があります。

もし、心に留めておくことの妨げとなっているものは何でしょうか？ プライドでしょうか？ 個人主義でしょうか？ 神様は誰の助けも借りないで立派にやってゆけるクリスチャンを求めておられるではありません。与えられている交わりを感謝し、キリストのからだに属する者として互いに無くてはならない存在であることを認めている人を求めておられるのです。